

BATTLE GREEN 20

今年もMartin Luther King, Jr. Day (以降MLK Jr. Dayと省略)が近づいてきた。これは非暴力的な黒人公民権運動の指導者で一九六八年に暗殺されたマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の功績をたたえる祝日で、毎年彼の誕生日(一月十五日)に近い一月の第三月曜日には全米各地でキング牧師の活動や公民権運動を記念するイベントが行われる。

レキシントン町でも、Lexington Coalition for Racial Equality (Lexington CORE)の主導で毎年MLK Jr. Dayのイベントが開催されてきたのだが、数年前からリーダーたちの高齢化と後継者不足で運営が困難になり、相談を持ちかけられたLexington No Place For Hate (以降LNPFHと省略)がこれを引き継ぐことになった。すでに町の恒例行事として定着していたMLK Jr. Dayイベントでは、町と警察の協力で当時の公民権運動を再現する行進を行い、その後町のホールで講演会や演奏をするというものである。LNPFHは伝統をそのまま受け継いだので、町の運営陣は主催者の変化を特に重要なものだと感じていなかったふしがある。

ところが一昨年、LNPFHが一部のエスニックグループの全国的な政治的戦略の犠牲になり、MLK Jr. Dayを二ヵ月後に控えて突如解散の運命をたどることになった。このいきさつについては別の機会に語ることにするが、簡単に説明するとLNPFHはあるエスニックグループの利己的な政治戦略のターゲットになり、その圧力に負けた町の指導者たちによって切捨てられたのである。

差別や偏見というきわめて難しい課題に取り組む私たち運営委員は、公的な場では政治的に中立であろうと努めてきた。ことに黒人のCさんは、「私は政治に関することは語らない主義。だから誰も私の政治的立場を知らない」と公言してきたほど発言には非常に注意を払ってきた。そんなLNPFHが、政治戦略の犠牲にされた不条理に私たちは深い失望と憤りを覚えていた。しかし、とりあえず目前に迫ったMLK Jr. Day イベントを見捨てるわけにはゆかない。LNPFH運営委員は、「MLK Jr. Day 運営委員会」を急設して無事に町の伝統を守ったのである。

MLK Jr. Day 運営委員会のメンバーが企画会議で再会したのは、まだバラック・オバマの大統領当選の興奮がさめない翌週だった。最初に目に入ったのはCさんの姿だった。私は、一瞬喜びを彼と分かち合うべきかどうか迷った。

ハーバード大学を卒業し、エンジニアとしてNASAに就職したCさんは、ハーバード大学の大学院を卒業した私の舅と同年代である。舅は、私と夫が共和党員ではないことを知りながらも、私たちの前でおおつびらにリベラルの理念や公民権運動家、環境保護論者を揶揄し、オバマに対する差別的なEメールを送りつけてくる。逆にCさんはジョークでも政治に関する話題は無視する。黒人が大学入学選考や職場で優遇されるaffirmative actionを苦々しく批判する舅とは対照的に、Cさんは一度として差別された愚痴を語ったことがない。同時代に同じ大学で教育を受けた二人だが、差別の犠牲になったことがないWASP(白人、アングロサクソン、プロテスタント)の舅と、祖父が奴隷だった黒人のCさんでは体験に基

バトルグリーン／連載エッセイ20

渡辺 由佳里

黒人大統領誕生の意味



★わたなべ ゆかり★

1960年兵庫県生まれ
 京都大学医療技術短期大学卒、同大学部専攻科修了
 京都大学医学部付属病院に三年間勤務
 その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、
 医療製品製造会社勤務などを経験
 2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞
 2003年二作目『神たちの誤算』を発表
 現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし
 翻訳やエッセイ執筆の日々を送る
 ●著者のブログ●

<http://watanabeyukari.weblogs.jp/>

づいた人生観が根本的に異なるのだ。Cさんの態度は、肌の色で差別されることも特別扱いされることもなく、実力だけで正當に評価されたいという強い願望の現われだと私は理解してきた。

しかし、この日のCさんは満面の笑顔で抱き合って再会を祝っただけでなく、オバマ当選の興奮をまったく包み隠さずとしかなかった。Cさんだけではなく、会議に集まった者は誰一人として「ところで誰に投票した？」と尋ねることなく、待ちきれないようにオバマ当選の「個人的体験」を語り始めた。

ことにCさんの言葉は、他の誰よりも胸に響いた。

Cさんにはレキシントン町で育った私と同年代の息子がいる。オバマの当選が決まった夜、その息子がシカゴからCさんに電話をかけてきてこう尋ねた。

「お父さん、あなたが生きているうちに(黒人の大統領が)実現すると想像したことがありましたか？」

Cさんは即座に「ノー」と答えたと。「私の生涯だけではなく、おまえの生涯でも実現するとは思わなかった」

Cさんと同年代の黒人たちは、すべてのニュース番組と新聞の世論調査がオバマ当選を予測しても、最後の最後まで白人が黒人を大統領に選ぶとは信じられなかったのである。彼らにとつてのオバマの当選は、多くの意味を持ちすぎてひとことでは説明することができないようである。Cさんの知人で若い黒人歴史教師は、あまりにも多くの複雑な感情に圧倒されて「明日学校で生徒に何を語るべきなのかわからない」と打ち明けたという。

マイノリティへの非営利教育プログラムを企画するCさんは、別の視点からもオバマ大統領が与える社会的影響に期待をかけている。それは黒人の子供たちの学業と社会での達成である。彼は、黒人の子供たちが学業で遅れを取る主要な原因が「自分に対する期待の低さ」だと信じている。子供は、良かれ悪しかれ無意識のうちに親や教師など周囲の大人の期待に沿おうとする。たとえば、教師が「アジア人は数学ができる」というポジティブなステレオタイプを言動で示すと、その教師に教わった多くのアジア人の子供たちは数学ができるようになる。同様に「黒人は勉強ができない。成功しない」といった周囲のネガティブな期待も子供を簡単に洗脳することができる。自己評価が低い親から低い期待をかけられた子供たちが成功することも難しい。この悪循環をオバマという非常に優れた頭脳を持つ黒人大統領が劇的に変えることができるのではないかと、Cさんは期待するのである。

黒人がアメリカでもっともパワフルな地位に就くことで、社会全体が黒人に対してこれまでよりも高い期待をかける。成功してあたりまえの環境で育つ黒人の子供たちは、自分に対する期待を高め、成功を信じるができるのではないだろうか。

私たちはCさんの見解にうなずき、それぞれにとつての「オバマ大統領誕生の意味」を打ち明けた。

今年のレキシントン町でのMLK Jr. Dayは、これまでよりも熱い会話が交わされることになりそうだ。